第五講　「心情」を読む　40分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

つい数日まえ、仲間にまじって日本海へ泳ぎにいった。仲間というのは、京都で長らくつづいている読書会の常連である。丹後半島の先の小さな漁村で民宿に泊まることになっていた。どんなところか、誰もまだ知らなくて少し不安だったが、海は澄みきっていたし、私たちのほかといえば、わずかな相客が甲羅を干しているばかりだ。皆、屈託なしに海水浴をたのしんだ。

夜も浜に出た。気の利く人がいて、花火をどっさり持参していた。いずれもパチパチと燃える種類で、火玉がとび出すようなのは混じっていなかった。がまの穂のように先の長いのは白い閃光（せんこう）を放って燃えた。誰の思いつきでもなかったが、十人余りが手に手に二、三本ずつそれを持ち、一時に火をつけて大きく振りまわしたとき、この火遊びはクライマックスだった。

線香花火のたばが、あとに残った。出はじめた夜風に消されがちなマッ

チをてのひらでかばいつつ、背を丸くして火をつける。先ほどの白い閃光とは打って変わって、おぼつかない、こまかな赤い火の松葉が、手もとからこぼれた。

いつとはなしに輪になってにぎやかに騒いでいた仲間が、いまは三々五々たむろして、なかのひとりの指先に燃えている線香花火に見入っていた。

「あ、落ちた」と誰かがいう。

「惜しいな」

がまの穂花火の陽気な、はじけるような明るさに対して、線香花火の小さな火玉には、闇に気圧（けお）されながら辛くも抵抗しているような、受け身で、健気（けなげ）な感じがあった。花火が尽きたあと、(1)皆しばらく言葉少なに、砂浜に座っていた。

これは私が京都の人間だからにちがいないが、線香花火の色を見ているうち、五山の送り火をふと思い出していた。

そのうちに風がいっそう出て、少し肌寒いほどになった。浜に引き上げてある一隻の小舟のなかに、大勢座りこんで風を避け「バー船」などとたわむれて、手持ちのウィスキーを飲んだ。

雲が晴れて、望に近い月があかるい。

「このまま舟が海にうかべばどうでしょう。十三人漂流」と一人がいう。

「うん、十三人。不吉な数。沖合で拾われる。その船がバイカル号」などと軽口をいい合って、またにぎやかになった。とびとびの話題が舷(ふなばた)ぞいにあっちに滑り、こっちにころがるにつれ、ますますにぎやかな談笑が起こり、「バー船」は砂の上で右に、左に、横ゆれをはじめた。

(2)月はますますあかるく照っている。

「今年の大文字は、どこで見るの」と横にいた一人が私に耳もとから尋ねた。

「去年も、その前も、御所で見た。あすこは人が少なくていいよ。……君の昔の家から見た大文字、思い出すね」

その頃、彼は吉田山の東がわに住んでいた。火がつき始めて暫(しばら)くは、ひどい煙で何も見えず、火勢が一気に上がると同時に、焔(ほのお)の立つ大文字が、間近に仰がれた。

「線香花火の火を見てると、大文字を思い出すけれど、(3)君はそんなことないか」と私が尋ねた。

「大文字の晩に、花火をしたのですか」と年若い仲間が聞く。

「いや、そんなことはしなかった。ただ、あの火の色が似てるから……町のどまんなかで見ていた大文字、左大文字、鳥居に船……妙法だけは全

然見えなかったけれど、うちの大屋根に上っても、五山の送り火の四つまではよく見えた昔の記憶では、ちょっと横にずれてKの字に見えていた大文字の火の色、さっきの線香花火に似ていたな」

「昔のことをいうと、旧暦の昔には、旧の七月十六日の晩は、十六夜（いざよい）の月が東山に上るにきまっていたわけだ」と物知りな仲間が、あとをつづけてくれた。

「魂（たま）を送る五山の火が消えたあとも、月夜であかるかった。魂は月あかりの中を夜見の坂こえて帰っていった。萩の花を手折ったり、すすきの穂に袖を触れたりしながら」

「まあ、いい話」と、女の声がいった。

今年の大文字の日は、まさか去年のようにぐずついた空模様にはなるまいな、どうか無事に火がともりますように、と私はしばらく心の中で思っている。大文字を見おわって帰るときの、何かしら気落ちと安堵（あんど）とさびしさのこんがらがった気分を思い出している。

今年の八月十六日は、送り火の消えたのち、やっとしてから、半月が空にうかぶだろう。(4)海辺の線香花火は、つもる年々の送り火の残映と思ってもいいが、今年の迎え火代わりと思っておくほうが、落着きがいい。この迎え火には、あかるい月が加勢している。月の助けのない送り火は、よほ

どあかるく燃えてくれるだろう。

（杉本秀太郎「大文字」による）

問一　傍線部分（1）「皆しばらく言葉少なに、砂浜に座っていた」とあるが、なぜそのようにしていたのか、述べよ。

問二　傍線部分（2）「月はますますあかるく照っている」とあるが、この一文はどのような表現効果を持っているか、述べよ。

問三　傍線部分（3）「君はそんなことないか」とあるが、なぜこのように尋ねたのか、述べよ。

問四　傍線部分（4）「海辺の線香花火は、つもる年々の送り火の残映と思ってもいいが、今年の迎え火代わりと思っておくほうが、落着きがいい」とあるが、なぜこのように考えるに至ったのか、説明せよ。

問一

問二

問三

問四

第五講 「心情」を読む 解答

問一

がまの穂花火をしているときには、十人余りが二、三本ずつ持ち、一時に火をつけて大きく振り回すことで、皆で盛り上がりにぎやかに騒いでいたが、残った線香花火をしているときには、ひとりの指先に燃えている火玉を見つめるという状況により、気持ちがだんだん落ち着いてきたから。

問二

花火の後の闇の静けさから、雲が晴れて月が明るくなってくるにつれ会話が盛り上がってくる様を表すと共に、大文字のあとは月が上って明るく照らすという話と似た状況を描写することで、大文字の火と線香花火の火が似ているという話を導く働きをしている。

問三

かつて一緒に大文字をみた友人から大文字の話が振られたことで、ついさっき線香花火をしたときに、大文字と火の色が似ていて五山の送り火を思い出したのは、自分だけではないのではないかということを確かめたくなったから。

問四

かつて見た大文字と火の色が似た線香花火の後に月夜であかるくなったことで、大文字を思い出したが、去年の大文字はぐずついた空模様になってしまって残念だったので、先ほどの線香花火はかつての送り火の残映とするのではなく、今年の迎え火がわりと思っておくと、今年は無事に火がともって月夜が楽しめるのではないかと考えたから。